

一、奥村織部妻の奇病	八二六	一、君子は本を務む	八四四
一、辛女子大奇外二章	八二七	一、武州押立村長五郎の至孝	八四五
一、土岐頼稔存寄の趣意書	八二七	一、本田新兵衛妻の不義	八四七
一、久能山東照宮の遷座式	八三一	一、笠翁椅	八四七
一、戸田城州深慮の事	八三三	一、大東軒壬戌十三夜弄月作	八四九
一、名香鴈鳩班の事	八三四	一、關東水災救助の沙汰	八四九
一、寛保壬戌の日蝕	八三五	一、大久保彌三郎指扣の事	八五〇
一、譯文後集抄十五件	八三五	一、少女の詠歌、父の禁牢を救ふ	八五〇
一、元文金銀吹替の上書	八三七	一、三綱領と八條目	八五一
一、大清國の事情	八三八	一、源義経が糧米借用の證文	八五三
一、雲霧に途方を失へる時外二條	八三九	一、藤幸野、李東郭唱和の詩	八五四
一、紅夷船中の要器	八四〇	一、北野の神祇二事	八五四
一、越後尻瀬町孝女の事	八四〇	一、八條宮家菅廟異聞	八五五
一、關源十郎の差扣	八四二	一、新星、西南に現る	八五六
一、金澤の日蝕	八四二	一、天竺德兵衛入道宗心の筆記	八五八
一、兼行法師の淫行	八四三		

卷四十六

卷四十七

可觀小説卷廿三

一、人心を得る道		候。とかく讀書の法は、推類にて見申儀簡要に御座候。	
人心を得申候道を、易に聖人被仰置候。道德有之人は自然と得人心申儀は、勿論の儀に御座候。去共道には其筋々有之、其筋にちがひ候へば端的にそむき候ゆゑ、聖人易をのべられ候て、其一むきの筋を被仰候。されば易を學ぶ事深く候へば過失なき筈に御座候。聖人も可以無大過と被仰候。人心を得申筋は、以尊下卑大得民也と申一言に被仰候事、尤成儀と奉存候。此度不存當儀共有之候て、聖語の日用に切なる儀を彌奉存候。去共此味惡敷心得候はゞ、巧言令色に罷成可申やと奉存候。其故常人にむざとは難申儀に御座候。とかく得人心の道は、以尊下卑の一語に有之事に御座候。貴公なども此後易に御熱被成候様に仕度候。誰も知様成事に候故、うかと見申候へども、事に當て氣付申事毎に有之、慥に罷成候て得力申儀御座候。さて以尊下卑は人君の事に候へ共、尊卑は位に不限、少にても己が品のほり申か、又は師徳など有之人に尊ばれ申類、皆尊と申物に			
一、新井白石の手翰		右の趣某へは、於江戸御直談に被仰聞候。凡人の交際は謙退ほど宜敷事は無之候。謙退あるものは着次に人心を得申候。易の教各其一筋をのべられ候ものに候。其次に人の歸服するは、以尊下卑にて候由被仰聞候。	
青地彌四郎様		昨日は乍御報拜見、御痺痛の事時氣不順故の御事と奉察候。此方にてても此間は、何か油斷仕候はゞ持病も差發可申様子にて候。保護のみにて罷在候。良久不得清話候て、御なつかしく候。なにとぞ御居すはり候ぶんにてはけつく不可然候間、暮がたよりちとく御出も、御保養の一筋に可有之か、奉待候外無他候。	
四月廿八日 正徳元年	室 新助	一、冊子御返被下領納仕候。結構の御稱美望外の事等に御座候。序文の事被仰下趣大幸に奉存候。外人の文章さらさら望ましからず候。貴兄御文章を冠しめ候て、永く子孫の家寶と仕るべく候。惣じて彼書世俗の見候て、一事もおもしろからぬ事共にて候へど、中々人に見せられ候ものに無之候。もし幸に火にも水にも遇候はで、残り候事も有之候は	